

自立した言葉の学び手を育成する授業の創造

～対話を生かして自らの学びと向き合う活動を通して～

若尾 大樹 那須 正和 山本 祐太郎

1. 主題設定の理由

(1) 生徒が生きる未来

国は、第4期教育振興基本計画の中で、「現代は将来の予測が困難な時代であり、その特徴である変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の頭文字5を取って『VUCA』の時代とも言われている。これまでの3回にわたる計画の中で、少子化・人口減少や高齢化、グローバル化の進展と国際的な地位の低下、地球規模の課題、子供の貧困、格差の固定化と再生産、地域間格差、社会のつながりの希薄化などは、社会の課題として継続的に掲げられてきた。こうした中、第3期計画期間中に発生した新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響及びロシアのウクライナ侵略による国際情勢の不安定化は、正に予測困難な時代を象徴する事態であったと言えよう。このような危機に対応する強靱さ（レジリエンス）を備えた社会をいかに構築していくかという観点はこれからの重要な課題である。（第4期教育振興基本計画（令和5年6月16日閣議決定）」と述べ、2040年以降の社会を見据えたとき、現時点で予測される社会の課題や変化に対応して人材を育成するという視点と、予測できない未来に向けて自らが社会を創り出していくという視点の必要性を示している。

このような現状をふまえ、文部科学省が進める「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会 論点整理（令和6年9月18日）」では、現行学習指導要領について、「学力観を『内容』中心から『資質・能力』を基盤としたものへと拡張」した点や「『資質・能力』の育成に向けた授業改善の視点として『主体的・対話的で深い学び』を提起した点を挙げ、「時代状況を一定程度踏まえて改訂されたものであり、以下のような前文と総則のコンセプトは優れており、現在においても概ね妥当との意見。（同整理）」と述べられている。加えて、「『知識及び技能』『思考力、判断力、表現力等』『学びに向かう力、人間性等』の3つの柱で資質・能力を整理したことは、これからの社会像や現状の課題を踏まえても基本的には妥当。（同整理）」ともあり、課題点は上げられているものの、現行学習指導要領を軸に改定が進められていく方向性が示されている。

生徒が生きる未来は「正解のない課題」があふれる社会である。そんな時代を、自らの手で切り拓く存在となるべく、生徒には自ら学び、他者と対話しながらより良い未来を創造していく力が求められると考える。

(2) 前研究の成果と課題

本校国語科では、昨年度までの3年間、全体研究「新たな価値を創造する生徒の育成」のもと、「生徒が自ら言葉の価値を創造する授業」を国語科研究主題として研究を行ってきた。研究主題にある「言葉の価値を創造する」とは、以下の通りである。

言葉を用いて行われる全ての活動を通して、生徒自身が言葉の意味や使い方を吟味、熟考することにより、自分の中に存在しなかった言葉の新たな価値に気づいたり、言葉による見方・考え方を働かせることで、既存の言葉の捉え方から脱し、新たな意義に気づいたりすること。そこから自己の言葉の世界を広げ言葉そのものの面白さや良さに気づくこと。

（「令和6年度山梨大学教育学部附属中学校研究紀要」）

研究主題の設定にあたっては、本校生徒の課題であった「内的調整」の改善を目的とした。「内的調整に課題がある状況」とは、例えば、単元を通して身につけた資質・能力や獲得した語彙を次の学習や自らの生活に結びつけて生かす意識が低い状況のことである。また、自らの学びに対して無自覚な傾向がある。単元を通してどのような資質・能力を身につけるか、またどのような資質・能力が身についたか、さらに、その学びの変容の契機となった言葉は何か、ということ意識できている生徒が少ないという状況のことである。国語科として、生徒が自らの学びを自覚し、言葉を学ぶ本質、すなわち言葉の価値に気づくため、これまで以上に対話を通した協働的な学習や自己調整を促す言語活動を行う。

昨年度実施した生徒アンケートから、教科研究の成果はあったと判断できるが、今年度実施した「令和7年度『学びについての調査』（R7, 5）」によれば、新たに「内容方略」、「興味価値」、「活動促進」に課題がある（研究介入の余地がある）ことがわかった。特に、協働学習に価値を見出すことや学習におけるメタ認知活

動（「学習計画の立案」や「学習課題の立案」）についての値が低かったことから、課題があると判断する。（全体総論p.10）

これら生徒の実態より、自分の学びに自覚的になったり、他者と協働することを有益に感じたりする方策を研究していきたいと考える。

- ① 疑問を持つ、問いを立てる、学習の見通しを持つ、協働を通して学びを深めることで、言葉を学ぶ本質を見出す生徒の育成。
- ② 対話を通した主体的な学びの実現
- ③ ICTを活用した学びの記録と共有、協働をためらわない生徒の育成

以上を、今年度の研究の出発点に据えることとした。

2. 本校国語科が求める方向性と研究内容

昨年度までの成果と課題をふまえ、次のような取り組みを通して言語能力の定着と充実を図り、生徒が自ら言葉の学びを深める、自立した言葉の学び手を育成する授業につなげたい。

（1）国語科における「自ら学びを深める生徒」

全体研究主題「自ら学びを深める生徒の育成～自立した学習者を育むための授業の創造～」における「自ら学びを深める生徒」とは、「自立した学習者」を指す。本校国語科の捉える「自立」とは、「他人との支えあいのネットワークをいつでも使える用意ができているということが、「自立」の本当の意味なのです。」（鷲田，2021）や「自立とは自分で立つことであるが、自分一人で立つことではない。誰かに支えられ、助けられながら立つ。これが自立というものの本質なのだ。」（都築，2021）といった、他者と協働し合える学習環境を生徒一人一人が作り上げている状態のことである。

これをふまえ、国語科では、「自立した学習者」のことを「自立した言葉の学び手」とし、次のように定義する。

自立した言葉の学び手とは、言葉の可能性を探究し続ける者のことである。言葉の可能性を探究する過程においては、言葉の価値に気づく問いを自ら立て、対話によって協働的にその解決をはかり、自らの言葉の認識を超えていく姿を指す。

また、言葉を用いて行われる全ての活動を通して、生徒自身が言葉の意味や使い方を仲間との協働の中で、吟味、熟考することにより、自分の中に存在しなかった言葉の新たな可能性を拓いたり、言葉による見方・考え方を働かせることで、既存の言葉の捉え方から脱し、新たな言葉の捉え方に気づいたりする姿を指す。

自立した言葉の学び手の定義にあたっては、前研究の「言葉の価値を創造する授業」の開発が、生徒の言葉に対する興味・関心を高め、生徒の言葉に対する向き合い方を変えることにつながった成果をふまえ行った。言葉そのものが元来有する価値に迫るだけでなく、対話（仲間との対話、自己との対話、過去の自己との対話、作品との対話、作者との対話、言葉との対話等）を通して、言葉の新たな価値に気づくことが、自立した言葉の学び手の育成につながると考える。

（2）自立した言葉の学び手の育成につながる「主体的な学び」の実現

①「自己調整力の育成」のためのモデルプラン開発

前年度までの研究において、生徒が単元の学習や課題設定に「没頭する姿（エンゲージメント）」を設定し、そのモデル（「学びのプロセスモデル」）を教師も生徒も意識することで主体的な学びを実現させた。自らの関心や解決すべき課題に基づき①目標設定を行い、②方略計画の場面で、学びの計画を立てる。次にその計画に従って学習を③遂行する。そして、生徒は、④形成的評価と⑤方略調整を行うことによって、自らの学びを自覚し調整を加える。さらに、生徒は自らの学びを仲間と交流し、現状をメタ認知することで、方略の調整に役立てる。その調整された方略を⑥遂行し、最後に目標を達成できたかを⑦総括的評価をし、それを次の単元に生かすというサイクルを作っている。（表1）

自立した言葉の学び手の育成についても、教師と生徒が「学びのプロセスモデル」を意識することが有効に働くと考える

表1 「学びのプロセスモデル ― 国語科編」

	見通し		学習活動				振り返り
	①目標設定	②方略計画	③遂行	④形成的評価	⑤方略調整	⑥遂行	⑦総括的評価
エンゲージメント（没頭する姿）	- 高いレベルの関心をもつ課題や日常生活で直面する課題、現実世界で解決すべき課題、自らのキャリア形成に関連する課題を選択する。（認知・行動） - 挑戦の感覚、知的好奇心、学習への期待感をもつ。（感情）	- ゴールを設定し、課題解決のための学習方略を考える。（認知） - 過去の学習経験を生かそうとする。（認知）	- 計画に基づいて、学習を遂行する。（認知） - 個人やグループでの学習活動に熱心に参加する。（行動）	- 自らの学びの効果を振り返る。（認知） - 自らの学習方略を調整する。（行動）	- 必要に応じて学習方略を修正する。（認知） - 学習の進み具合を把握し、見通しをもつ。（認知・行動）	- 計画に基づいて、学習を遂行する。（認知） - 調整された学習方略に基づき、個人やグループでの学習活動に熱心に参加する。（行動）	- 自らの学びの質や成果を振り返る。（認知・行動） - 学ぶ面白さや楽しさを感じる。（感情） - 有能感や充実感をもつ。（感情）

②「『場』を整える工夫」の具体的な方策

自立した学習者を育む手立てとして、一年次は「『場』を整える工夫」を講じる。国語科における「『場』を整える工夫」は、次の通りである。

(1)環境としての「場」を整える工夫

- いつでも学習の調整や振り返りができる「場」・・・学びの計画書、学びの履歴書
- いつでも協働ができる「場」・・・ICTの活用（Google workspace、ロイロノート）
- いつでも書籍や辞書が利用できる「場」・・・図書室での授業、関連書籍の充実
- エキスパートから学びを得られる「場」・・・県立文学館館長、県立図書館館長及び県立美術館職員による出前授業

(2)活動としての「場」を整える工夫

- いつでも指導事項が意識できる「場」・・・毎時間の目標の設定（めあて、Step等）
- いつでも対話ができる「場」・・・恒常的なグループ（4人）活動の利用、教師による形成的評価
- クリティカルな視点から言葉を意識させる「場」・・・言葉に対して問いを持つ活動、言葉を吟味する活動、言葉の学びを発信する活動など

③自らの学びと向き合うためのデザイン開発

前研究を進める手立ての一つに「学びの視覚化」があった。自らの学びをデザインすることで、計画や過程が可視化され、自らの学びに自覚的になるという効果が検証された。「学びの計画者」は、そのためのワークシートである。これより、本研究における自立した言葉の学び手を育むためにも、「学びの視覚化」は不可欠であると考え。このような手立てを通じて、生徒が自らの学びと向き合うことができれば、自立した学習者へと近づくと考えられる。

そのためには、まず、言葉に対する強い興味を持つことが重要である。授業の中で出会った言葉そのものや、使われ方に対してひっかかったり、つまずいたりすることがその第一歩だ。次に、初めて出会う教材や作品に対して、なぜ本文の中では、このような言葉の使われ方をしているのか、また、本当にこの言葉の意味で捉えてよいのかという疑問を生徒が持てるようにする。

「学びの計画書」に加え「学びの履歴書」（後述）を単元の学習活動に取り入れる。学習計画の立案や、履歴書という形で、自己の学び視覚化、メタ認知する活動を行うことで、言葉への興味を高めるとともに、自らの学びと向き合う機会とする

（3）自立した言葉の学び手の育成につながる「対話」の実現

①対話から生まれる「問い」とその更新

「個別最適な学び」や「自由進度学習」といった、生徒の主体性を育むキーワードについて議論されるとき、学習課題設定の主体についてしばしば話題に上がる。生徒に資質・能力を身につけさせるために最も有効な学

習課題を検討し、単元内において設定をする主な主体は教師である。一方、本校国語科においては、自立した言葉の学び手を「言葉の価値に気づく問いを自ら立て、対話によって協働的にその解決をはかり、自らの言葉の認識を超えていく姿」と定義し、生徒自身が作品や教材の価値に迫るような問いを立てられるようになることを目指している。つまり、学習指導要領における指導事項や教材の特徴をふまえ、教師は学習課題を計画するが、その学習課題は生徒と共に設定していく。作品や教材と出会うことで生じた素朴な疑問から問いを生み出し、言葉の価値に迫る問いを、教師と生徒、あるいは生徒と生徒が対話を重ねながら練り上げていく営みこそ、まさに「自立」した姿であると考ええる。

②「自立」のネットワーク構築のための協働とICTの活用

これまでも小グループによる協働的な活動の有用性は周知されているところであり、本校の生徒達も積極的に交流を行い、学習課題の解決に向かう様子が見られることから、対話による協働学習の成果が上がってきていると判断する。生徒は自分の力だけでは解決できない課題に対して、他者に意見を求めたり、他者の学習の進め方を参考にしたりして解決に向かう。

具体的には、まず、生徒が主体的に考え、動き出したいくなるような、生徒の生活の文脈に近く切実な判断や対応が必要となる学習課題や、知的好奇心を刺激することができる学習課題を生徒同士の対話、教師と生徒の対話から設定したい。さらに、この課題は、学習者自身と他者がそれぞれに持つ知識や経験を引き出し合うことで解決していく必要があるもの、つまり、協働を通した解決が必要となるものとし、国語科でこれまでも積極的に取り入れてきたワールド・カフェやジグソー学習などを用いてさらに深い学びにつながるものとしたい。また、それらの活動における対話の有用性に気づき、課題解決のために生徒が自在に対話の形態や対象を選択することのできる授業を構成していきたいと考える。

3 研究を支える取り組み

(1) S E L F (総合的な学習の時間) との関わり

本校では、「総合的な学習の時間」における探究的な学習についても研究を重ねている。1年生から3年生まで、探究的な学習を系統的に配置し、発達段階に応じたカリキュラムを組み、最終的には生徒個人で探究できるだけの力をもつことを目標に、全職員で指導に当たっている。その過程の中で、総合的な学習の時間において生徒に身に付けさせたい資質・能力として挙げている「課題設定能力」「情報収集能力」「情報選択(分析)能力」「表現力」「自己省察力」を、各教科との連携を図りながら身に付けさせるため、教科横断的な学習を意識した年間指導計画を作成している。国語科においても、国語科で身に付けた資質・能力を総合的な学習の時間で活用できるように、また、総合的な学習の時間で身に付けた力を国語科の授業においても活用できるように、関連性を図りながら授業を展開することを意識している。また、ファシリテーションスキルでは、特に対話の質を向上させていきたい。コミュニケーションの方法が多様化していく社会の中で、生徒たちは新しいファシリテイトの力が求められている。ただ意見交流を行うのではなく、交流の目的を意識させること、相手の意見を受容するだけでなく建設的な話し合いとなるように問い返しをすること、目的を果たすために誰のどの意見が有効であったか、またどんな言葉が交流を促進したか意識すること等、生徒のファシリテーションスキルを向上させる対話活動を設定している。

(2) 学びの履歴書

生徒が自ら言葉の学び手としての問いを立てたり(課題設定力の育成)、単元において学習課題を立てたりするのは、難しい。そこで、これまでの学びを、単元ベースまたは、資質・能力ベースのいずれかでまとめ、課題設定力の育成につなげたい。さらに、生徒は「学びの履歴書」を書くことで、自らの学びを振り返り、自分に必要な力を自覚することができる。そして、ここが、次の学習に向けての出発点となる。

(3) 学びの計画書

「学びの計画書」とは、生徒自身が単元の目標をふまえ、自分自身の学びを言語化し、学習活動をデザインするための計画書である。評価の観点からは、自己調整を行う姿を見取るためのワークシートでもある。主体的に学習に向かう態度を育むことに有効であることはもちろん、自己の学びを自覚したり、学びのプロセスモデルに示される、学びのサイクルを実感したりすることにも有用であると考ええる。生徒はこの計画書により、

言語活動のゴールに向けてどのような方略が必要かを考える力だけではなく、仲間の計画書から自身に必要な学びを再構成したり、学習が進んでいく中で必要な情報を最も効果的な方法で取得したりする力が身につくようになる。常に情報収集と調整を加えることで学習者主体の学びを実現させたい。

(4) FUZOKUワークシート

自立した言葉の学び手を育成するため、「語句・語彙力」の育成に力を入れる。本校ではこれまで、言語感覚を働かせることの有用性を生徒させるため、また意識的に言葉と関わる態度を育てるため、言葉のもつ価値や実生活における有用感に気付かせる取り組みを行ってきた。今年度も全学年を通し、新聞記事を活用した「FUZOKUワークシート」の作成と活用に取り組んでいる。学校における授業のみでなく社会的な事象と自分自身の考えを交差させる場面を作ることで、語彙の拡充とより豊かな言語感覚を養うことにつながると考える。今年度も特に、「言葉」の力の基盤である語句・語彙力を育むため、生徒が新しい時代に生まれた新しい言葉や、出会ったことのない言葉に注目し使いこなしていくことを目指し、語彙の獲得を意識した問題作成を心がけている。新聞記事の内容については、言語的な内容、社会的な内容、理科学的な内容など幅広く取り上げている。

(5) 語彙指導「Word Bank (ワードバンク)」の活用

Google work space上に語彙を蓄積することによって、豊かで洗練された語彙の獲得を目指す。言葉の捉え方を更新していくために、豊かで洗練された語彙の獲得は必要不可欠である。Google work spaceを利用した語彙学習を積極的に活用し、振り返りがすぐにできるように自分のクラウド上に語彙を書き留めていくようにしていきたい。語彙の保管場所を「Word Bank」として生活の様々な場面で得た新しい言葉を蓄積していくようにしていきたい。FUZOKUワークシートと同様に、全学年、全教科での学びを支える語彙指導として、その土台作りを目指していく。

4 参考文献

- ・文部科学省．中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編．東洋館出版社．2018
- ・文部科学省．第4期教育振興基本計画（令和5年6月16日閣議決定）．2023
- ・文部科学省．今後の教育課程，学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会 論点整理（令和6年9月18日）．2024
- ・鷺田清一．「特別授業3.11君たちはどう生きるか」．河出書房新社．2021
- ・都築学．「自立って何だろう——社会と子どもたち」．新日本出版社．2021
- ・子ども主体の授業づくりハンドブック．2024
- ・山梨大学教育学部附属中学校．全体総論「新たな価値を創造する生徒の育成」．2025
- ・山梨大学教育学部附属中学校．令和6年度研究紀要．2025